

日蓮大聖人御書全集

じみようほつけもんどうしよう

持妙法華問答抄

じみょうほつけもんどうしょう

持妙法華問答抄

こうちょう

ねん

弘長 3年 ('63)

42歳さい

まれ じんしん 受

ぶっぽう 聞

そもそも、希に人身をうけ、たまたま仏法をきけり。し

かるに、法に浅深あり人に高下ありと云えり。いかなる法を

修行してか、速やかに仏になり候べき。願わくは、そ

の道を聞かんと思う。

こた い いえいえ そんしょう

答えて云わく、家々に尊勝あり、国々に高貴あり。皆そ

くにぐに こうき こくおう 勝

の君を貴み、その親を崇むといえども、あに国王にまさる

べきや。ここに知んぬ、大小・権実は家々の諍いなれど

し だいしょう ごんじつ いえいえ あらそ

べきや。ここに知んぬ、大小・権実は家々の諍いなれど

いちだいしようぎょう なか ほつけひと すぐ

なか

ほつけひと

すぐ

とんしようばだい

も、一代聖教の中には法華独り勝れたり。これ、頓証菩提

しなん じきしどうじょう しゃりん

しゃりん

の指南、直至道場の車輪なり。

うたがい い にんし きょうろん こころ え しゃく つく もの
疑つて云わく、人師は経論の心を得て釈を作る者な

り。しからば則ち、宗々の人師、面々各々に、教門を

設しゃく つく ぎ た ぼだい しようとく
しつらい、釈を作り義を立てて菩提を証得せんと志す。

なんむな なんむな ほつけひと すぐ そうちら
何ぞ虚しかるべきや。しかるに、法華独り勝ると候わば、
心せばくこそ覚え候え。

こた い もう こころ 狹そうちら そうちら
答えて云わく、法華独りいみじと申すが心せばく候わ
ば、釈尊程心せばき人は世に候わじ。何ぞ誤りの甚だ
しゃくそんほどこころ ひと よ そうちら
なんあやま はなは

いつきょう

いちりゅう

しゃく

ひ

まよ

覚

さとらせん。

むりょううぎきよう

い

しゅじゅ

ほう
と

しゅじゅ

ほう
と

無量義經に云わく

い

しゅじゅ

ほう
と

しゅじゅ

ほう
と

ほうべんりき

ことは、方便力をもつてす。

四十余年にはいまだ真実を顯

しじゅうよねん

しんじつ

あらわ

はちまんにん

ぼさつ

さづ」云々。この文を聞いて、

大莊嚴等の八万人の菩薩、

だいしょうごんとう

つい

むじょう

もん

こころ

一 同に「無量無邊不可思議阿僧祇劫を過ぐとも、

終に無上

りょうげ

たま

もん

菩提を成ずることを得ず」と領解し給えり。

この文の心は、

けいん

きょう

つ

華嚴・阿含・方等・般若の四十余年の經に付いて、いかに

念仏を申し禅宗を持つて仏道を願い、無量無邊不可思議

ねんぶつ

もう

ぶつどう

ねが

むりょうむへんふ

かしき

あそぎこう　す
むじょうばだい　じょう
え　い
阿僧祇劫を過ぐるとも、無上菩提を成ざることを得じと云えり。

しかのみならず、方便品には「世尊は法久しくして後、要
ず當に眞実を説きたもうべし」ととき、また「ただ一乘の
法のみ有り。二無くまた三無し」と説いて、この経ばかり
まことなりと云い、また二の巻には「ただ我一人のみ、能く
救護をなす」と教え、「ただ樂つて大乗經典を受持するの
みにして、乃至、余經の一偈をも受けざれ」と説き給えり。
文の心は、ただわれ一人して、よくすくいまもることをな
もん　こころ
我　いちにん
救　けい
護　ご

す。法華經をうけたもたんことをねがいて、余經の一偈を
もうけざれと見えたり。また云わく「もし人信ぜずして、
この經を毀謗せば、則ち一切世間の仏種を断ぜん乃至そ
の人は命終して、阿鼻獄に入らん」と云々。この文の心
は、もし人この經を信ぜずしてこの經にそむかば、則ち
一切世間の仏のたねをたつものなり。その人は、命おわ
らば無間地獄に入るべしと説き給えり。これらの文をうけ
て、天台は『はた、魔の仏と作るにあらずや』の詞、正し
くこの文によれり」と判じ給えり。

にんし しゃく

たの

ぶつせつ

なん

ぶっぽう

ただ人師の釈ばかりを憑んで仏説によらずば、何ぞ仏法

という名を付くべきや。言語道断の次第なり。これによつ

て智証大師は「経に大小なく理に偏円なしと云つて一切

人によらば、仏説無用なり」と釈し給えり。天台は「もし

深く所以有り、また修多羅と合わば、録してこれを用いる。

文無く義無ければ信受すべからず」と判じ給えり。また云わ

く「文証無ければ、ことゞとくこれ邪の謂いなり」とも云
えり。いかが心得べきや。

と
い
にんし しゃく
そらう
にぜん しょきょう

きょう
だいいち

と

しょきょう
おう

の

「この經は第一」とも説き、「諸經の王」とも宣べたり。

ぶつせつ

もち

そうちう

ん。

答えて云わく、たとい「この經は第一」とも「諸經の王」

こた

きょう

だいいち

しょきょう

おう

とも申し候え、皆これ權教なり。その語によるべからず。

もう
そうちら

ほとけ

りょうぎきょう

依

ことば

ふりょうぎきょう

依

これによつて、仏は「了義經によりて不了義經によるべからず

い

みょうらくだいし

きょうあ

しょきょう

おう

れ」と説き、妙樂大師は「たとい 經有つて『諸經の王』

い

いこんどう

せつ
もっと

だいいち

い

と云うとも、『已今当の説に最もこれ第一なり』とは云わ

い

ぎし

しゃく

たま

す。兼・但・対・帶なること、その義知るべし」と釈し給え

り。この釈の心は、たどい經ありて「諸經の王」とは云うとも、「前に説きつる經にも、後に説かんずる經にも、この經はまされり」と云わば方便の經としれといふ釈なり。されば、爾前の經の習いとして、今説く經より後にまた經を説くべき由を云わざるなり。ただ法華經ばかりこそ、最後の極説なるが故に、「已今當の中」にこの經独り勝れたり」と説かれて候え。されば、釈には「ただ法華に至つて、前教の意を説いて今教の意を顯す」と申して、法華經にて如來の本意も教化の儀式も定まりたりと見えた

てんだい

によらいじょうどう

しじゅうよねん

しんじつ

あらわ

ほつけ

はじ

しんじつ

あらわ

い

り。これによつて天台は「如來成道してより四十余年には、

いまだ真実を顯さず。法華に始めて真実を顯す」と云え

もん

こころ

によらい

よ

い

たま

しじゅうよねん

り。この文の心は、如來、世に出でさせ給いて四十余年が

間は真実の法をば顯さず、法華経に始めて仏になる実

の道を顯し給えりと釈し給えり。

と
い
そうちう

たま

ほけきよう

はじ

ほとけ

成

まこと

問うて云わく、「已今當の中に法華経勝れたり」と云うこ

とは、さも候べし。ただし、ある人師の云わく『四十余年

にはいまだ真実を顯さず』と云うは、法華経にて仏になる

声聞のためなり。爾前の得益の菩薩のためには、『いまだ

しょうもん

にぜん
とくやく
ぼさつ

い
なか
ほけきようすぐ

にんし
い

ほけきよう

ほとけ

しじゅうよねん
成

真実を顯さず』と云うべからず』といふ義をば、いかが心得
そうちろう
候べきや。

答えて云わく、「法華經は一乘のためなり、菩薩のために
あらず。されば、『いまだ真実を顯さず』と云うこと、二乗
に限るべし」と云うは、徳一大師の義か。これは法相宗の
人なり。このことを伝教大師破し給うに、「現在の麤食者は、
偽章數巻を作つて、法を謗じ人を謗す。何ぞ地獄に墮ちざ
らんや」と破し給いしかば、徳一大師は、その語に責めら
れて、舌八つにさけてうせ給いき。

しんじつ あらわ

にじょう

い

「『いまだ眞実を顯さず』とは、二乗のためなり」と云わ
ば、最も理を得たり。その故は、如來布教の元旨は、元よ
り二乗のためなり。一代の化儀、三周の善巧、しかしな
がら二乗を正意とし給えり。されば、華嚴經には「地獄の
衆生は仏になるとも、二乗は仏になるべからず」と嫌い、
方等には「高峰に蓮の生いざるよう」に、「二乗は仏の種をい
りたり」と云われ、般若には「五逆罪の者は仏になるべ
し、二乗は叶うべからず」と捨てらる。かかるあさましき捨
て者の仏になるをもつて、如來の本意とし、法華經の規模

もつと

りえ

もと

によらいふきょう

がんし

もと

にじょう

いちだい

けぎ

さんしゅう

ぜんぎょう

もと

にじょう

たま

たま

けごんぎょう

じごく

しゅじょう

ほとけ

成

にじょう

ほとけ

たね

きら

ほうどう

たかね

はちす

お

にじょう

ほとけ

たね

煎

にじょう

い

はんにや

にじょう

ほとけ

たね

煎

もの

ほとけ

成

す

淺

す

にょらい

ほい

ほけきょう

きぼ

とす。

これによつて天台云わく「華嚴・大品もこれを治すること能わず。ただ法華のみ有つて、能く無学をして、還つて善根を生じ、仏道を成ずることを得せしむ。ゆえに妙と稱す。また、闡提は心有り。なお作仏すべし。一乗は智を滅す。心生ずべからず。法華能く治す。また称して妙となす」云々。この文の心は委しく申すに及ばず。誠に知ぬ、華嚴・方等・大品等の法薬も一乗の重病をばいやさず。また三惡道の罪人をも菩薩ぞと爾前の経にはゆるせど

にじょう

みょうらくだいし

よしゅ

も、二乗をばゆるさず。これによつて妙楽大師は「余趣を
じつ
え
じょきょう
あ
にじょう
まつた
な
し。故に、菩薩に合し、二乗に対す。難きに従つて説けば
ゆえ
ぼきつ
がつ
にじょう
たい
かた
したが
と
なり」と釈し給えり。

しかのみならず、「二乗の作仏は一切衆生の成仏を顕
にじょう
さぶつ
いつきいしゅじょう
じょうぶつ
あらわ
す」と天台は判じ給えり。修羅が大海を渡らんをば、これ難
てんだい
はん
たま
しゅら
たいかい
わた
な
なん
容 易

しとやせん。嬰児の力士を投げん、何ぞたやすしとせん。

すなわ

えいじ
りきし
な

ほとけ

成

にぜん

しからば則ち、仮性の種ある者は仏になるべしと爾前に
しようしゅ
ものさぶつ
と
も説けども、いまだ焦種の者作仏すべしとは説かず。かか

じゅうびょう

癒

ひと

ほつけ

るうやく

る重病をたやすくいやすは、独り法華の良薬なり。ただ
すべからく汝仏にならんと思わば、慢のはたほこをたお
し、忿りの杖をすてて、ひとえに一乗に帰すべし。名聞
名利は今生のかざり、我慢偏執は後生のほどしなり。あ
あ、恥ずべし恥ずべし、恐るべし恐るべし。

問うて云わく、一をもつて万を察することなれば、

あらあら法華のいわれを聞くに、耳目始めて明らかなり。

ただし、法華経をばいかよう心得候いてか、速やかに
菩提の岸に到るべきや。伝え聞く、一念三千の大虚には慧日

くもることなく一心三觀の廣池には智水にごることなき人こそ、その修行に堪えたる機にて候なれ。しかるに、南都の修學に臂をくたすことなかりしかば、瑜伽・唯識にもくらし。北嶺の学文に眼をさらさざりしかば、止觀・玄義にも迷えり。天台・法相の両宗は、ほどぎを蒙つて壁に向かえるがごとし。されば法華の機には既にもれて候にこそ、いかんがし候べき。

答えて云わく、「利智・精進にして觀法修行するのみ法華の機ぞ」と云つて無智の人を妨ぐるは、當世の学者の

所行なり。これ還つて愚癡・邪見の至りなり。「一切衆生
皆成仏道」の教えなれば、上根・上機は觀念觀法もしか
るべし、下根・下機はただ信心肝要なり。されば、經には
「淨心に信敬して、疑惑を生ぜずんば、地獄・餓鬼・畜生
に墮ちずして、十方の仏前に生ぜん」と説き給えり。いか
にも、信じて次の生の仏前に期すべきなり。
譬えば、高き岸の下に人ありて登ることあたわざらんに、
また岸の上に人ありて縄をおろして、「この縄にとりつかば、
我岸の上に引き登さん」と云わんに、引く人の力を疑い、

繩の弱からんことをあやぶみて、手を納めてこれをとらざ
らんがごとし。いかでか岸の上に登ることをうべき。もし、
その詞に隨いて手をのべこれをとらえば、即ち登ること
をうべし。「唯我一人、能為救護（ただ我一人のみ、能く救護
をなす）」の仏の御力を疑い、「以信得入」の法華経の教
えの繩をあやぶみて、「決定無有疑」の妙法を唱え奉ら
ざらんは、力及ばず、菩提の岸に登ること難かるべし。不信
の者は「墮在泥梨」の根元なり。されば、經には「疑い
を生じて信ぜずんば、則ち當に惡道に墮つべし」と説か

れたり。受けがたき人身をうけ、値いがたき仏法にあいて、
いかでか虚しくて候べきぞ。同じく信を取るならば、ま
た大小・権実のある中に、諸仏出世の本意、衆生成仏の
直道の一乗をこそ信ずべけれ。

されどもまた諸人にまされり。ここをもつて經に云わく「能
くこの經を持つ者は、一切衆生の中において、またこれ
第一なり」と説き給えり。大聖の金言疑いなし。しかる
に、人、この理をしらず見ずして名聞・狐疑・偏執を致せ

るは、墮獄の基なり。ただ願わくは、經を持ち、名を十方
の仏陀の願海に流し、誉れを三世の菩薩の慈天に施すべし。
しかれば、法華經を持ち奉る人は、天龍八部・諸大菩薩
をもつて我が眷属とする者なり。しかのみならず、因身の
肉団に果満の仏眼を備え、有為の凡膚に無為の聖衣を着ぬ
れば、三途に恐れなく、八難に憚りなし。七方便の山の頂
に登りて九法界の雲を払い、無垢地の園に花開け、法性の
空に月明らかならん。「是人於仏道、決定無有疑」の文、憑
みあり。「唯我一人、能為救護」の説、疑いなし。「一念信

解げの功德は五波羅蜜ごはらみつの行こに越え、「五十展轉ごじつてんでん」の隨喜は八十年の布施に勝れたり。「頓証菩提とんしょうぼだい」おしはるぐん八十一年の布施に勝れたり。「頓証菩提」の教えは遙かに群典に秀で、「顯本遠寿けんぽんおんじゆ」の説は永く諸乗に絶えたり。ここをもつて、八歳の童女は大海より来つて経力を剎那に示し、本化の上行は大地より涌出して仏寿を久遠に顯す。言語道断の經王、心行所滅の妙法なり。

しかるに、この理をいるかせにして余經にひとしむるは、謗法の至り、大罪の至極なり。譬えを取るに物なし。仏の神変にても、何ぞこれを説き尽くさん。菩薩の智力にて

も、いかでか、これを量るべき。されば、譬喻品に云わく
「もしその罪を説かば、劫を窮むとも尽きじ」と云えり。文
の心は、法華経を一度もそむける人の罪をば、劫を窮むと
も説き尽くし難しと見えたり。しかるあいだ、三世の諸仏の
化導にももれ、恒沙の如來の法門にも捨てられ、冥きより冥
きに入つて、阿鼻大城の苦患いかでか免れん。誰か心あ
らん人、長劫の悲しみを恐れざらんや。

ここをもつて、經に云わく「經を読誦し書持すること
あらん者を見て、軽賤憎嫉して、結恨を懷かん。その人は

命終して、阿鼻獄に入らん」云々。文の心は、法華経を
よみたもたん者を見て、かろしめ、いやしみ、にくみ、そね
み、うらみをむすばん、その人は、命おわりて阿鼻大城に
入らんと云えり。大聖の金言、誰かこれを恐れざらんや。
「正直に方便を捨て」の明文、あにこれを疑うべきや。
しかるに、人皆經文に背き、世ことごとく法理に迷えり。
汝、何ぞ悪友の教えに隨わんや。されば、邪師の法を信じ
受くる者を名づけて、毒を飲む者なりと天台は釈し給えり。
汝、能くこれを慎むべし、これを慎むべし。

つらつら世間を見るに、法をば 貴しと申せども、その人
をば万人これを悪む。汝、能く能く法の 源に迷えり。い
かにと云うに、一切の草木は地より出生せり。これをも
つて思うに、一切の仏法もまた人によりて弘まるべし。こ
れによつて、天台は「仏世すらなお人をもつて法を顕す。
末代いづくんぞ法は貴けれども人は賤しと云わんや」とこ
そ釈して御坐しまし候え。されば、持たるる法だに第一な
らば、持つ人随つて第一なるべし、しからば則ち、その人
を毀るは、その法を毀るなり。その子を賤しむるは、即ち

おや いや

し

とうせ ひと ことば こころ

その親を賤しむなり。ここに知んぬ、当世の人は詞と心と

合

こうきょう

おや う

すべてあわず。孝経をもつてその親を打つがごとし。あに

みよう しょうらんは

じごく くる

おそ

冥の照覧恥ずかしからざらんや。地獄の苦しみ、恐るべ

おそ

つつし

つつし

じようこん のぞ

ひ げ

し恐るべし、慎むべし慎むべし。上根に望めても卑下す

ほんかい

げこん のぞ

ひ げ

べからず、下根を捨てざるは本懐なり。下根に望めても

きようまん

じょうこん

漏

こころ

到

惰慢ならざれ、上根ももるることあり、心をいたせざる

が故に。

ゆえ

さと

みち絶

えん

かよ

およそ、その里ゆかしけれども、道たえ縁なきには通う

こころ

疎

ひとこい

たの

ちぎ

心もおろそかに、その人恋しけれども、憑めず契らぬには

ま おも か げつけいいうんかく すぐ
待つ思いもなおざりなるように、彼の月卿雲客に勝れたる
ちようぜんじょうど い 易 行 われ すなわ
霊山淨土の行きやすきにも、いまだゆかず、「我は即ちこ
ちち じゅうなん おん みたてまつ
れ父なり」の柔軟の御すがた見 奉るべきをも、いまだ見
たてまつ まこと たもと 腐 みたてまつ
奉らズ。これ誠に、袂をくたし胸をこがす歎きならざ
らんや。
く い そら くも いろ ありあけがた つき ひかり
暮れ行く空の雲の色、有明方の月の光までも、心をも
おも こと 折
よおす思いなり。事にふれおりにつけても後世を心にかけ、
はな はる ゆき あした ご せ ここる
花の春、雪の朝も、これを思い、風さわぎ村雲まよう夕べ
わす ひま いき い いき
にも忘るる隙なけれ。出づる息は入る息をまたず。いかな

じせつ

まいじさ ゼねん

ひがん わす

つきひ

る時節ありてか「毎自作是念」の悲願を忘れ、いかなる月日

ありてか

「無一不成仏」

の御経を持たざらん。

昨日が今日

になり、去年の今年となることも、これ期するところの余命

にはあらざるをや。すべて過ぎにし方をかぞえて年の積も

かた

つ

るをば知るといえども、今行く末において、一日片時も誰か

し

いまゆ

すえ

いちにちかたとき

たれ

命の数に入るべき。臨終すでに今にありとは知りながら、

いのち

かず

い

りんじゅう

いま

し

我慢偏執・名聞利養に著して妙法を唱え奉らざらん

こころざし

ほどむけ

甲斐

みようほう

とな

たてまつ

ことは、志の程無下にかいなし。さてそは、「皆成仏道」

みのり

い

ひと

ぶつどう

物

憂

の御法とは云いながら、この人いかでか仏道にものうから

ざるべき。色なき人の袖には、そぞろに月のやどることか
は。

また命すでに一念にすぎざれば、仏は一念隨喜の功德
と説き給えり。もしこれ二念三念を期すと云わば、平等
大慧の本誓、頓教・一乘・皆成仏の法とは云わるべから
ず。流布の時は末世・法滅に及び、機は五逆・謗法をも納め
たり。故に、「頓証菩提」の心におきてられて、狐疑・執著
の邪見に身を任することなかれ。

生涯いくばくならず。思えば一夜のかりの宿を忘れて、
おもいぢや
仮
やど
わす

いくばくの名利をか得ん。また得たりとも、これ夢の中の榮
めずら たの
え、珍しからぬ樂しみなり。ただ先世の業因に任せて 嘗む
せけん むじょう 覚
べし。世間の無常をさとらんことは、眼に遮り、耳にみて
くも
り。雲とやなり、雨とやなりけん。昔の人はただ名をのみ
あめ
聞く。露とや消え、煙とや登りけん。今の友もまたみえず。
けむり のぼ
我いつまでか三笠の雲と思うべき。春の花の風に隨い、秋
われ もみじ みかさ くも おも はる はな かぜ したが
の紅葉の時雨に染まる。これ皆、ながらえぬ世の中のためし
ほけきよう よ みなろうこ 永 よ なか あき
なれば、法華経には「世は皆牢固ならざること、水沫泡焰の
すいまつほうえん
ご」とし」とすすめたり。

勸

「何をもつてか衆生をして無上道に入ることを得しめん」
の御心のそこ、順縁・逆縁の御ことのはすでに本懐なれば、しばらくも持つ者もまた本意にかないぬ。また本意に叶わば、仏の恩を報ずるなり。悲母深重の経文心安ければ、「ただ我一人のみ」の御苦しみも、かつがつやすみ給うらん。釈迦一仏の悦び給うのみならず、諸仏出世の本懐なれば、十方三世の諸仏も悦び給うべし。「我は即ち歡喜す。諸仏もまたしかなり」と説かれたれば、仏悦び給うのみならず、神も即ち隨喜し給うなるべし。伝教大師これを講

たま はちまんだいぼさつ むらさき けさ くうや
じ給いしかば、八幡大菩薩は 紫の袈裟を布施し、空也
しよういん よ たま まつおのだいみょうじん かんぱう 防
上人これを読み給いしかば、松尾大明神は寒風をふせが
たも せ給う。

しちなんそくめつ しちふくそくしょう しちなん すなわ しちふく
されば、「七難即滅、七福即生（七難は即ち滅し、七福
すなわ しよう いの すなわ めつ しちふく
は即ち生ぜん」と祈らんにも、この御経第一なり。「現世
あんのん み おんきょうだいいいち
安穩」と見えたればなり。他国侵逼難、自界叛逆難の御祈禱
みょうてん す たこくしんぴつなん じかいほんぎやくなん ごきとう げんせ
にも、この妙典に過ぎたるはなし。「百由旬の内に諸の
すいげんな と ひやくゆじゅん うち もろもろ
衰患無からしむ」と説かれたればなり。

とうせい ごきてう せんだいり ふ
しかるに、当世の御祈禱はさかさまなり。先代流布の

ごんきょう まつだい るふ さいじょうしんじつ ひほう
權教なり。末代流布の最上眞実の秘法にあらざるなり。譬
えば、去年の暦を用い、鳥を鶴につかわんがごとし。こ
れひとえに、權教の邪師を貴んで、いまだ実教の明師に
値わせ給わざる故なり。惜しいかな、文・武の卞和があら玉、
いづくにか納めけん。嬉しいかな、釈尊出世の髻の中の
明珠、今度我が身に得たることよ。十方諸仏の証誠とし
ているかせならず。さこそは「一切世間に怨多くして信じ難
し」と知りながら、いかでか一分の疑心を残して、「決定し
て疑いあることなけん」の仏にならざらんや。

かこおんのん くる
受 来

過去遠々の苦しみは、いたずらにのみこそうけこしか。

などか、しばらく不変常住の妙因をうえざらん。未來

ようよう たの 且々ここる やしな 強

永々の楽しみはかつがつ心を養うとも、しいてあながち

でんこうちょうろ

みょうり

むさぼ

さんがい やす

に電光朝露の名利をば貪るべからず。「三界は安きことな

かたく

によらい

おし

しょほう

まぼろし

し、なお火宅のごとし」は如來の教え、「ゆえに諸法は幻

け

ぼさつ ことば

じやつこう

みやこ

のごとく化のごとし」は菩薩の詞なり。寂光の都ならず

みなく

ほんがく

すみか

はな

なにごと

たの

ば、いづくも皆苦なるべし。本覺の栖を離れて、何事か楽しみなるべき。

ねが

げんぜあんのん

ごしようぜんしょ

みょうほう

たも

願わくは、「現世安穩、後生善処」の妙法を持つのみこ

こんじょう みょうもん ごぜ ろういん
そ、ただ今生の名聞、後世の弄引なるべけれ。すべから
く、心を一にして南無妙法蓮華経と我も唱え他をも勧めん
のみこそ、今生人界の思い出なるべき。南無妙法蓮華経、
なんみょうほうれんげきよう われ とな た すす
南無妙法蓮華経。

にちれん かおう
日蓮 花押